第14回金融教育に関する小論文・実践報告コンクール

優秀賞

実践報告部門

六次産業化を意識した起業家教育

～中学生が地元の農産物を栽培し、商品開発・販売するまでの取り組み～

埼玉県・春日部市立中野中学校 教諭　小谷 勇人

知るぽると
www.shiruporuto.jp

© 金融広報中央委員会 2017

1. 研究主題設定の理由

現在の我が国の食料自給率（カロリーベース）は38％（平成28年度）となっている。この数値は主要先進国の中でも最低である。中学校の社会科を教える教師として、地理的分野にて食料自給率の話をすると、生徒たちが実態に対して愕然とする姿を何度もみてきた。そこで授業では、日本の食料自給率をどのように上げるかを話し合うのだが、生徒たちは食料に困って生きている訳ではない。「安い輸入農産物に押され、自給率が下がっているのだから輸入を少なくすれば良い。」などの回答は、実際に地域で活動している農家のことを真剣に考えた発言としては的を射る内容ではないといえる。もっと地域の生の声を聞き、日本の農業の置かれた現状と向き合い、自分たちができることを真剣に考えなければ絵空事の学習となってしまうと感じていた。私はその答えが、「六次産業化」の学習にあると考えている。

「六次産業化」とは、農業が一次産業のみにとどまるのではなく、二次産業（農産物の加工・食品製造）や三次産業（卸・小売、情報サービス、観光など）にまで踏み込むことで農村に新たな価値を呼び込み、お年寄りや女性にも新たな就業機会を自ら創り出す事業と活動である[1)]。1990年代半ば頃から東京大学名誉教授の今村奈良臣が「一次×二次×三次＝六次産業」として提唱したものとされる。平成22年12月3日には、「六次産業化・地産地消法」が施行され、ＪＡを主体とした様々な事例があるなど、効果を上げている。一方で、加工・製造にまでいく手段がないと嘆く農家の生の声を聞き、実態としては足踏みが続いている状態と捉えた。

そこで、地域の六次産業化の中心に学校を据え、農家・食品加工製造業者・ＪＡ・市役所農政課・小売販売店と連携して中学生が自ら農産物を栽培し、その農産物を使って新商品開発を行い、販売までを一貫して行うプロジェクトを企画した。

充実した活動にするために、社会科地理的分野での産業学習を土台とし、総合的な学習の時間と連動して実際の農産物の栽培、新商品の開発を行う単元計画を作成して授業実践を行った。

（資料３　本実践の展開例）

次に本単元が、教育活動とどのように密接に関わっているかを、現行の『中学校学習指導要領 総合的な学習の時間編』を参考に論じていく。

> 内容（３）自然体験や職場体験、ボランティア活動などの社会体験、ものづくり、生産活動、観察・実験、見学や調査、発表や討論などの学習活動を積極的に取り入れること。

内容の取り扱いについての配慮事項に記載されている文言である。本実践は、上記の活動のほとんどが網羅されている。実際に農作物として埼玉県のブランド米「彩のかがやき」をつくる活動や新商品を生み出すために模擬企業を立ち上げて調査活動を行い、発表や討論を繰り返す活動を通して、人々や社会、自然と関わることになる。この活動を通して、生徒は自分と向き合い、他者に共感することや地域社会の一員であることを大きく実感する。まさに生きた教育活動として機能することになる。

また、この一連の活動はキャリア教育の視点から起業家教育の活動として大きな意義を持つと考えている。最近では起業家教育の取り組みが全国的に拡大してきたようである。平成27年３月には経済産業省が様々な起業家教育の事例を載せた冊子を全国の学校に配布した。「生きる力」を育む取り組みとあわせて、チャレンジ精神、積極性を向上し、自己肯定感を高めるなどの効果が期待される教育手法として、起業家教育を初等中等教育段階に取り入れようとする指導事例集となっている[2)]。

また、平成29年３月に公示された新学習指導要領の中学校社会科の経済単元において「起業について触れるとともに…」という文言が追加された。このことからも、起業家教育の機運が大いに高まっているといえる。

その中で、模擬企業の出店体験や起業家の講演会を聞くことの意義は大いに感じているが、さらにリアリティを追求することの必要性を感じていた。そのリアリティとして、実際に農作物を育てるなどの「汗をかく活動」を行うことによって、さらに自分事として捉えることが必要だと考えた。この活動を経験するからこそ、新商品開発時に「自分たちでつくった農作物だから…。」と真剣に考えるようになる。

以上のような「六次産業化を意識した起業家教育」を学校現場で行うことが重要であると考え、本研究主題を設定した。

次に、主題から考えた具体的な取り組みを記す。

> （１）地域の農家の支援を受け、地元で名産となっている農産物をつくること
> （２）実際に企業を経営している方の講義を聞くことや自分たちの考えている新商品の講評やサポートを受けたりすること
> （３）実際に生まれた商品の販売活動を行うこと
> （４）「新商品開発プロジェクト」の総括をすること

© 金融広報中央委員会 2017

上記の段階的な取り組みを通して、大きな教育的効果を得られると考えた。

2. 研究仮説について

研究仮説に向けて、手立てを二つに設定した。

手立て①

探究的な学習となるように、それぞれの学習活動がスパイラル状の学習計画となること

本実践は主に総合的な学習の時間において行う。現行の学習指導要領が平成20年度に改訂された際に、「総合的な学習の時間」の内容の取り扱いの改善として、探究的な学習としての充実が示されている。

総合的な学習の時間における探究的な学習とは、問題解決的な活動が発展的に繰り返されていく一連の学習活動のことである[3)]。

①課題の設定 ⇒ ②情報の収集 ⇒ ③整理・分析 ⇒ ④まとめ・表現 の学習をさらなる新たな課題を見つけ、探究を繰り返しながら学習活動を発展的に繰り返していく。つまり、総合的な学習の時間が長いスパンで計画される必要があることを示している。

（資料１　本実践の学習イメージ）

そのような考えから、本実践は約１年間をかけて他の学校行事と両立させながら行った。本校は３学期制であるので、１学期は社会科の産業学習とリンクしながら農業体験、２学期は新商品開発を中心に、３学期に店舗の大きさの関係で代表の生徒のみにはなったが、実際の販売活動という段階で行った。

「自分たちのつくった農作物だから…。」「自分たちが考えて生み出した商品だから…。」このような感性を刺激し、学習活動への取り組みが意欲的になる。学んだことを自己と結びつけて、自分の成長を自覚したり自己の生き方を考えたりする。このように、探究的な学習においては、生徒の豊かな学習の姿が現れてくる。まさに、起業家教育で求められているチャレンジ精神、積極性を向上し、自己肯定感を高めるなどの効果が出ている取り組みといえるだろう。

手立て②

六次産業化の取り組みにおいて、学校が地域の核となって活動するようにすること

六次産業化を活発に議論する際に大切な視点は「地域の活性化」である。地域を代表とするブランド品を自分たちの手で生み出すことが六次産業化の目標であるのであれば、地域が大きく活性化することにつながっていく訳である。それでは、その主導権を学校が先導していくことについての可能性を探っていく。戦後、六次産業化という言葉は使わないまでも、地域の拠点として加工事業や直売所などの事業を行ってきたのはＪＡ（農協）である。公共的性格を持つＪＡの場合、農業法人や民間企業等に比べ消費者や地域社会との連携を取りやすい性格がある一方で、民間部門など異業種との「仲間づくり」は苦手な分野であるといわれている[4)]。

そこで教育的効果を大いに打ち出し、地域の中学校を核として様々な異業種が絡み合い、地域を代表するブランド品を生み出す活動を行うことを提唱したい。地域の中での中学校という存在は、「おらが町の学校」という思いが働きやすいと考える。地域に根ざす人々は、損得を度外視して学校側の取り組みに協力しやすい地盤があるといえる。だからこそ、この中学校という存在の特性を活用し、地域の中での「ハブ（車輪の中心部）」として生徒が地域内の主人公として活躍することができると考える。この活動からは、商品のストーリー性が生まれる。

（資料２　地域の「ハブ」としての学校）

まずは生徒が農家の方と共に汗をかいて農産物をつくり、生まれた農産物を食品加工製造業者と共に新商品に昇華させるまでの活動を行い、最終的には地域の小売店と共に販売活動を行う。この一連の活動が消費者の心を掴むのである。事実、商品を販売した時に、「こんな活動を中学生が授業でしているのなら買おう。」「また来年も必ず作って下さい。」との消費者の声を聞くことができた。これはまさに商品のストーリー性が動機となって、消費者が購買する思いに至ったことが分かる。地域内で学校が核として機能することによって、異業種間での「仲間づくり」を行うことができたといえる。六次産業化は異業種が関わるだけに、協同が必要になる。学校が核となることで協同の潤滑油になれると考えている。

以上の二つの手立てから研究仮説を

生徒が六次産業化の視点を意識して主体的に地域の生産活動に関わることで、経済に関しての生きた知識や技能を持ち、地域の中に新しい価値を見いだす起業家精神を養うことができるであろう

と設定し、実践を行った。

© 金融広報中央委員会 2017

３. 具体的な実践の様子について

一学期…農業体験（県のブランド米「彩のかがやき」）

本実践の中で、一番大切にしたのがこの活動を支えてくれる農家の方との出会いであった。様々な学校で米作り体験などは行われているが、収穫した米を商品化するという発想に理解を示してくれる方との出会いが実践の出発点となった。

農家の方とＪＡの担当者、市役所農政課職員を招いて４月に「農家講演会」を行い、実践への動機付けをした。その後、指導の下で種籾を発芽させ、種まきを生徒自身が行った。その後の生育も水やりボランティアを募り、小鳥に種籾を食べられてしまうなどの苦労を経験しながら、苗を植えるまで時間をかけて行った。苗を植えてからは生育管理ボランティアを募り、理科教諭とともに田んぼの生態系調査と連動して草取りや苗の発育調査を継続して行った。そして、10 月に入り、待ちに待った稲刈りを迎えた。生徒たちはここまで多くの苦労をして、収穫を迎えたので全員が笑顔であった。「汗をかく活動」によって、自分たちの収穫した米に誇りや愛情を持った瞬間であった。（資料４　農業体験）

二学期…新商品開発プロジェクト

次に収穫した米を使って新しい付加価値をつけた新商品を開発する活動を行った。そのためにも、米に着目したので、米菓に精通した企業と連携をとる必要性を感じた。そこで市内にある「三州製菓株式会社」と連携を行った。三州製菓は、米粉を使ったバームクーヘンを開発するなどの新しい試みを実現している企業である。生徒たちの自由な発想を叶えてくれる地元の企業であると確信した。

11 月に三州製菓社長を招いて講演会を行い、新商品を開発するプロジェクトを開始した。その後、模擬企業内で役割分担し一つの商品を考えた。生み出した商品を三州製菓の社員の方（四つの部門の方）にアドバイスして頂き、クラス内での代表者を決めるプレゼンを行った。最後には体育館でクラス代表が三州製菓の代表者の元で一つの商品を選ぶ流れで行った。（資料５　新商品開発プロジェクト）

最終的には選ばれた商品は工場の生産ラインに乗らない性質の商品であったことが判明し、生み出すことはできなかった。それもまた現実の社会の厳しさだったことを生徒たちは体感する機会となった。

三学期…実際の販売活動

生徒が考えた新商品は生み出すことはできなかったが、三州製菓社長の鶴の一声で自分たちが収穫した米を使った「中米（堅焼きしょうゆ煎餅）」を作ることができるようになった。そして、２月に地元の武里駅前の三州製菓株式会社の関連企業である「三州総本舗」で販売会を行うことになった。中身は任せてあるので、包装紙に貼るシールの自作に取り組んだ。図柄を学年で公募し、八つの図柄を選出し購買意欲を誘った。図柄にはＱＲコードも載せ、３分間で今までの取り組みが分かるＣＭ動画を見ることができるようにした。そして、実際の販売会では用意した煎餅 2,400 枚が３時間で完売する程の大盛況であった。（資料６　実際の販売活動）

４．最終考察（研究の成果）

今まで「地域」という発想で論じてきたが、同じ意味として「地域」という言葉を「地方」と読み替えて最近の国の動向と照らし合わせてみたい。

第二次安倍内閣成長戦略の目玉政策の一つに「地方創生」というキーワードがあった。2014 年にいわゆる地方創生大臣となった石破茂氏は、中央（＝東京などの中心部）に対して地方の重要性を次のような表現で指摘している[5)]。

> 地方が甦ることなくして、日本が甦ることはない。本気で日本を甦らせるためには、新しい動きを地方から起こさなくてはならない。地方から革命を起こさずして、日本が変わることはない。

「地方創生」の集積が、日本全体の創生につながるという考えである。元気な地域が日本全体のあらゆる場所で生まれてくることが、この国の明るい未来を築いていく。そして、地域の活性化には「若者」「バカ者」「よそ者」が必要だといわれている。地域の学校の生徒は、良い意味ですべての要素を満たしているといえる。若者の無鉄砲でありながら勇気を持った別の視点が、地域に入っていくことが今こそ必要である。

本実践の成果は、地域に対する誇りや愛情を大いに喚起したことである。一連の活動を通して、生徒たちは農業という職業に対して喜び・苦労の両面を学んだ。その後の新商品開発の取り組みにおいても、自分たちで育てた農作物だからこ

© 金融広報中央委員会 2017

そ積極的になって主体的に実現化させようとする態度に現れた。地域の農家の方、ＪＡ職員、市役所職員、三州製菓株式会社の方、様々な外部の人材との関わりの中で生徒たちは支えられていることにも気づくことになった。この気づきが、地域に対する誇りや愛情を大いに喚起した。そして、ふるさと春日部を一層愛する気持ちにつながったと考えている。

（資料７　生徒の取り組み考察）

注1）農林水産政策研究所『6次産業化の論理と展開方向－バリューチェーンの構築とイノベーションの促進－』　平成27年1月

注2）初等中等教育段階における起業家教育の普及に関する検討会　経済産業省『小学校・中学校・高等学校における実践的な教育の導入例』平成27年3月

注3）文部科学省『中学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編』　平成20年９月

注4）室屋有宏『地域からの六次産業化～つながりが創る食と農の地域保障～』創森社　平成26年9月

注5）石破茂『日本列島創生論 地方は国家の希望なり』新潮社　平成29年4月

© 金融広報中央委員会 2017

単元の指導計画

単元名　地理的分野　世界から見た日本の姿
小単元名　世界から見た日本の資源・エネルギーと産業

1．指導目標

①世界的視野から日本の資源・エネルギー消費の現状を理解させるとともに、国内の産業の動向、環境やエネルギーに関する課題を取り上げ、日本の資源・エネルギーと産業に関する特色を大観させる。

②日本の産業の特色を農林水産業、工業、商業・サービス業の三つの産業分野から捉えることを通して、それぞれの産業が抱える課題について関心を高めるとともに、六次産業化という意見があることも理解させる。

2．評価規準（産業学習の内容のみ記載）

	関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技能	知識・理解
評価基準	変化する日本の農業や工業の学習を通して、農産物の貿易自由化と日本の食料自給率についての課題意識や先進工業国である日本の課題に関心を持ち、これからの日本の産業の在り方を考察している。	日本の産業の特色と課題について、世界の産業と比較し関連付けて考察している。また、六次産業化の視点を身につけたことで、これからの日本の産業の在り方を考察し、適切に表現している。	日本の産業に関する特色を、分布図やグラフなどさまざまな資料から読み取ったり、図表などにまとめたりしている。	日本の産業の大まかな地域特性およびそれぞれの産業の特色や課題について理解し、その知識を身につけている。

3．単元の指導計画（6時間扱い）

時	・ねらい、学習活動等	評価の観点 関	思	技	知	○◇□☆　評価規準
1	単元を貫く課題「日本の資源・エネルギー及び産業はこれからどのようになっていくべき					
	【ねらい】世界の主な鉱産資源、エネルギー、産業の分布や変化の特色を調査させる。					
	・鉱産資源の分布やエネルギー消費量が世界的に偏っていることに気づくとともに、地球温暖化対策や持続可能な社会実現のための取り組みについて関心を持つ。	○				○先進工業国が鉱産資源やエネルギーの大量消費国であることを読み取り、地球温暖化の原因や対策について関心を高めている。
2	【ねらい】鉱産資源の乏しい日本が資源やエネルギーをどのように確保しているか調査させる。					
	・日本の資源・エネルギーの自給率が低い現状や発電量の内訳とその課題に気づき、将来的なエネルギー問題の解決策を考える。		◇			◇資源・エネルギー自給率のグラフや発電量の内訳を表したグラフから読み取ったことを環境問題と関連付けて考察している。
3	【ねらい】世界と比べてみて、日本の農林水産業にはどのような特色があるのか調査させる。					
	・日本が食料や木材の世界有数の輸入国となっている現状を理解する。					☆農産物の貿易自由化や食料自給率の移り変わり、木材供給量についての資料から読み取って理解している。
	・日本の漁業が、排他的経済水域の設定や資源保護の視点から育てる漁業へ方針転換したことに関心を持つ。	○			☆	○日本の遠洋、沖合漁業が伸び悩み、養殖漁業や栽培漁業が進められていることに関心を持ち調べようとする
4	【ねらい】日本の工業の特色の資料から、工場の立地がどのように変化してきたのか調査させる。					
	・日本は工業原料のほとんどを輸入しているため、臨海型の工業地域が形成されてきたこと、近年は高速交通網の整備により内陸型の工業地域が形成されてきたことに気づく。			□	☆	□太平洋ベルトへの集中と交通網の整備に伴い内陸部へ工業団地の形成が展開されたことを読み取ることができる。
	・加工貿易に依存してきた日本の工業が、外国との貿易上の対立をさけるためや産業の国際化に対応するために、世界各地に工場を移していることを理解する。					☆日本が国際競争の波にさらされ、外国製品との競争や関税などをめぐる貿易上の対立に直面している現状に関心を持ち、日本の企業がどのように対応しているか理解している。

© 金融広報中央委員会 2017

時	・ねらい、学習活動等	評価の観点 関	思	技	知	○◇□☆　評価規準
5	【ねらい】日本の商業・サービス業には、世界と比べてどのような特色があるのか調査させる。					
	・日本は商業の就業者数が多いことに気づくとともに、近年では店舗や商業形態が多様化し、地方の商店街の活性化が課題となっていることを理解する。 ・新しい都市型産業として注目される情報サービス産業や介護サービス産業の成長に関心を持つ。	○			☆	☆第三次産業の就業者数やその県別割合、生産額の変化を表した資料などを読み取って、国内の産業構造の特色を理解している。 ○情報、福祉、観光産業などの新しいサービス業の成長から、日本の将来のサービス業に関心を高めている。
6	【ねらい】それぞれの産業の特色を知り、日本は今後どのような産業構造であるべきか調査させる。					
	・日本が今後どのような産業構造になったら様々な課題を解決できるか考えさせ、自分の意見としてまとめる。		◇			◇自分の意見について様々な資料を収集し、読み取った情報を活用してまとめている。

教科と総合的な学習とのリンク

総合的な学習の時間指導計画（20時間扱い）

1学期　農業体験

時	・ねらい、学習活動等	○評価規準（評価の観点）
1	【ねらい】専門家の方の講義を受けることで農作物を育てることへの意欲を高める。	
2	・農家の方から田んぼの1年間についての流れや育てる際の苦労や思いを講義してもらう。その後、種籾の育て方を学び、解決への見通しを持つ。	○調査が十分にできない部分や疑問点などを整理し、自分たちの活動に役立たせようとしている。 （学習への主体的、創造的な態度）
3	【ねらい】どのように田植えをした方が収穫率があがるか追究させる。	
4	・自分で調べてきた様々な情報源を基に、効果的な田植えの仕方を発表して学び合う。その後、田植えの際は学級単位で出された指示の元に行う。	○自分たちの学級の区画の収穫率をあげることを課題とし、その課題解決に向けて意欲的に取り組んでいる。 （課題設定能力・問題解決能力）
5	【ねらい】実際に収穫を行い、収穫物をどのような活用方法にするか追究させる。	
6 7	・教わった収穫の仕方を元にして稲の収穫を行う。その後、収穫した米をどのように活用するか個人で考える。	○自分たちで収穫した農作物をどのように活用して地域の方に喜んでもらえるかを自分なりに考えている。 （学び方・ものの考え方）

2学期　新商品開発プロジェクト

時	・ねらい、学習活動等	○評価規準（評価の観点）
1	【ねらい】様々な専門家の方の講義やアドバイスを受けることで知識を深めさせる。	
2	・商品を開発したことがある専門家の方から当時を振り返り、考えていたことを講義してもらう。その後、自分の企画している商品についてアドバイスをしてもらい課題を整理する。	○調査が十分にできない部分や疑問点などを整理し、自分が企画している商品内容に役立たせようとしている。 （学習への主体的、創造的な態度）

© 金融広報中央委員会 2017

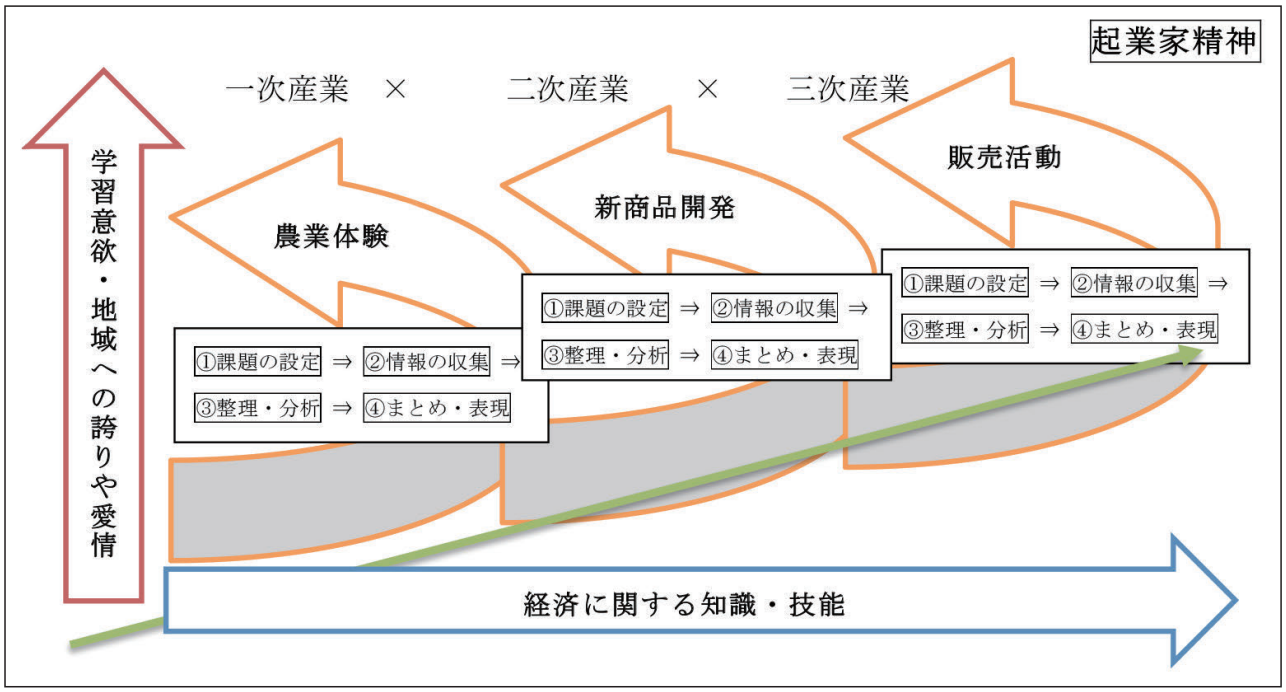
時	・ねらい、学習活動等	○評価規準（評価の観点）
3 4 5 6	【ねらい】「新商品発表会」に向けて新商品の企画書づくりをする。 ・各教科等の学習を通して得てきた知識や技能や、作成に当たる際に自分で調べてきた様々な情報源を基に、班（模擬企業）ごとの新商品の企画書づくりをしていく。	○自分たちの班の新商品が採用されることを課題とし、その課題解決に向けて意欲的に取り組んでいる。 （課題設定能力・問題解決能力）
7 8	【ねらい】班の新商品が採用されるために、どのような手段や展開があるのかを追究させる。 ・学級内での発表で行われる新商品発表会において採用されるために、班（模擬企業）で考えたプレゼン活動をする。	○自分たちで収穫した農作物をどのように加工すれば消費者に喜んでもらえるかを自分たちなりに考えている。 （学び方・ものの考え方）

３学期　実際の販売活動

時	・ねらい、学習活動等	○評価規準（評価の観点）
1 2	【ねらい】新商品が売れるために、どのような手段や展開があるのかを追究させる。 ・採用された新商品の利益率を高めるための手立てを考えさせる。出てきた内容を取捨選択して取り入れて、販売会への準備を行う。	○採用された商品がさらに利益を高めるようにするために役立てようとしている。 （学習への主体的、創造的な態度） ○新商品が完売することを課題とし、その課題解決に向けて意欲的に取り組んでいる。 （課題設定能力・問題解決能力）
3 4 5	【ねらい】利益を出すために、どのような手段や展開があるのかを追究させる。 ・実際の販売活動において、利益を出すために班（模擬企業）で考えた活動を行う。その際、上手く効果が上がらない場合に代替案を出して活動を行う。	○利益を出すために班（模擬企業）で練った案の効果が表れている。また、時間の中でさらにより良い代替案を考えている。 （学び方・ものの考え方）

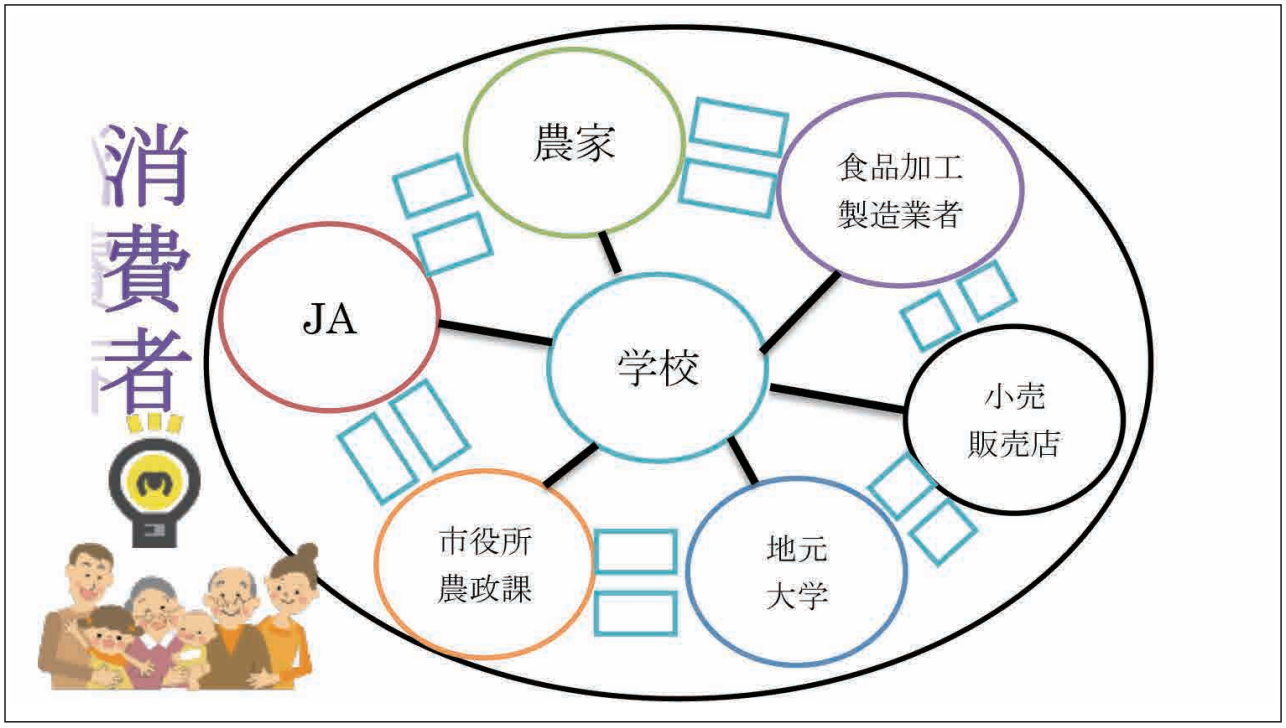
© 金融広報中央委員会 2017

資料１　本実践の学習イメージ



１年間を通した長いスパンの探究的な学習となっている。各産業の回数分、課題を設定した上でのプロジェクト型の学習を行っている。その度に、「経済に関する知識・技能」と「学習意欲・地域への誇りや愛情」が高まっているイメージ図となっている。

資料２　地域の「ハブ」としての学校



上記の図は、地域の学校が核となって異業種間の仲立ちをしていることをイメージしている。学校がそれぞれの業種をつなぐことで、今まで関わりの無かった異業種間がつながる。学校が「ハブ」として機能していることを示している。この車輪の外にいる消費者が生み出された商品を評価する。

© 金融広報中央委員会 2017

資料３　本実践の展開例（６／６）

（１）目標

・日本が今後どのような産業構造になったら様々な課題を解決できるか考えさせ、自分の意見としてまとめる。

【思考・判断・表現】

（２）展開

時	○主な学習活動・学習内容	・教師の支援と指導上の留意点　◎評価	資料
活動の開始 10	〈学習課題〉「日本は今後どのような産業構造であるべきか」考えてみよう。		
	○第一次産業、第二次産業、第三次産業それぞれの日本の中においての課題を確認する。 個人	・今までに既習した内容を整理させる。その際に「日本の産業別人口割合」の資料を参考して意見をまとめさせる。	日本の産業別人口割合ワークシート
	○４人班になって、自分の内容を発表して討論させ、より良い意見に練り上げる。 小集団	・教師は間に入り、討論がスムーズにいくように助言しながら回る。	
	○数班が発表する。 全体		
活動の展開① 20	〈発問〉六次産業化という考え方について理解しよう。		
	○六次産業化の内容を理解する。 全体 ・農業が一次産業のみにとどまるのではなく、二次産業や三次産業にまで踏み込むことで新たな価値を創り出す事業と活動であること。	・単に六次産業化の事例動画を視聴するだけでなく、それぞれの業種のつながりという視点でメモを取りながら確認するようにさせる。	動画『株式会社秀農業』
	○もう一度現在の「日本の産業別人口割合」を確認する。 全体	・確認する際に食料自給率、変化しつつある工業の特色、拡大するサービス業の様子などに触れる。	
	○日本がより良くなるための産業別人口割合の比率を考える。 個人	・他の人の意見を変えることができるように根拠を明確に話すことができるよう指導する。 ◎自分の意見について様々な資料を収集し、読み取った情報を活用してまとめている。 【思考・判断・表現】	
	↓↓（生徒の記述例）↓↓		
	例　⇒ 一次産業 20%　二次産業 30%　三次産業 ⇒　50% 理由　食料自給率が低い現状は変えたい。今の日本では３次産業の割合が低いと考えるので、３次産業の割合は少なくて良いと考えた。		
活動の展開② 15	〈発問〉様々な他者の意見に触れて、自分の意見を再度まとめてみよう。		
	○クラス内で、自由に歩き回って意見を共有する。 全体	・クラス内を自由に歩き回って生徒は他者の意見を聞きに行かせる。その際に、教員も生徒に混じって意見を聞いて観察する。	ワークシート
	○他者とは違う鋭い視点で言及できた生徒に発表させる。 全体	・今の日本の現状を踏まえつつ、建設的な意見を持っている生徒に発表させる。	
	○本時の授業で分かったことを踏まえて再度論述させる。 個人	・時間があったら、意見が大きく変容した生徒の意見を教師が取り上げて共有する。	

© 金融広報中央委員会 2017

時	○主な学習活動・学習内容	・教師の支援と指導上の留意点　◎評価	資料
まとめ5	○評価カードに本時の意見や感想を書く。 次時の授業についての確認をする。	・分かったことや気づいたことを具体的に記述させるようにする。	評価カード

資料４　農業体験

一連の活動の出発点となる大事な活動である。農家の方の講演を頂いて動機付けをし、実際に収穫するまでの本実践の根幹となる農業体験となった。具体的には以下のような段階で取り組みを行った。もちろん、全体としての動きを簡単に書いただけである。夏休みにも欠かさず田んぼに行って観察を行う等、この背景にある水やりや生育管理ボランティア生徒の陰の努力があってこその成功といえる。

（１）米づくりの知識を習得する段階

・４月 ２時間　農家の方から講演を頂く（田んぼの１年間）⇒　田植えについての調べ学習

（２）実際の米づくりの段階

・６月 ２時間　田植え体験　～手で植えていきます～

・10月 ２時間　収穫体験　～鎌で刈り取ります～

・家庭科の時間にて　収穫した米の試食

（３）次の活動に向けて

・10月 １時間　収穫した米を加工して何かできないか考える

田植え前　農家の方の説明

こんなに収穫できました

© 金融広報中央委員会 2017

資料５　新商品開発プロジェクト

課題：「私たちがつくったお米を使って、人々に喜ばれる新商品を開発しよう」

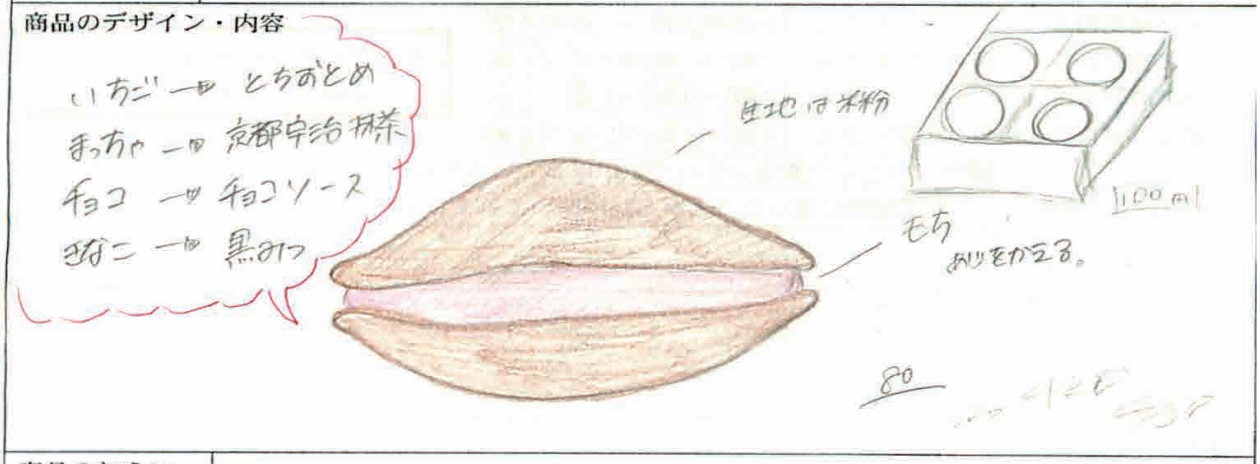
上記の課題をテーマとして、８時間に及ぶ新商品開発プロジェクトを行った。農業体験の成果を踏まえて、同じく専門家から学ぶ⇒自分たちで考える⇒より良い発想を共有する３つの段階で行った。今回は実際に模擬企業として役割を分担して行うことによって、プロジェクト型の提案授業とすることができた。具体的には以下の取り組みである。

（１）起業するまでの段階　10月 ２時間

①三州製菓株式会社 社長の講演会

～キャリア教育の視点もあるので、商品紹介及び仕事上の苦労や喜びの話なども～

②個人でどのような「お米」を使った新商品を開発するかを考える　　↓優秀提案となった資料↓

商品名	もちドラ		
商品のデザイン・内容			
商品のねらい	広い年代で食べれる。		
商品の特徴	一口サイズ（いちご、チョコ、抹茶、きなこ） 外はフワフワ中はモチモチ		
ここがウリ！	食感、味の種類		
商品価格	400円	生産量	80
目標販売量	70	目標売上高（A）	400 円× 70 ＝28 000
原材料の単価	280	原材料費総額（B）	280 × 80 ＝ 22400 円
材料① 生地	材料⑥		
材料② いちご	材料⑦	販売にかかる費用（C）	8000 円
材料③ チョコ	材料⑧		
材料④ 抹茶	材料⑨	目標利益額　A－（B＋C）	28000－（22400＋8000）＝13600 円
材料⑤ きなこ	材料⑩ はこ 115円		

© 金融広報中央委員会 2017

（2）実際に商品を開発する段階　11月 4時間

③④起業準備　班で一人ずつ発表し、どのような新商品が良いか企画する　⇒　模擬企業スタート

SCENE4　**班を会社の組織に見立て、動いて行きましょう。（5人班は商品開発を2人）**

役職名	メンバー	仕事内容
社長	A	・今回のプロジェクトの中心として動く。 ・メンバーの意見をまとめて最終決定を下す。
広報	B	・商品名を決定する。（印象的なものになるように導く） ・プレゼンの内容や方法を決めて発表する。
商品開発	C	・新商品の内容を決定する。 ・商品デザインを決定する。（ポスターづくりなども）
経理	D	・原材料費がどのくらいかかりそうか調べる。 ・新商品が夢物語で終わらないようにアドバイスする。

（商品開発　）の担当として自分が今後頑張りたいことを宣言しよう！

ポスターづくりをていねいにやり、みんなにえらんでもらえるようにする！

⑤⑥新商品プレゼン会 準備

三州製菓株式会社の４つの部署の若手の方に「自分たちの新商品が採用されそうか、魅力的に感じたり売れたりしそうか」という視点で25分ずつ各クラスを回って頂いた。視点としては①商品名が魅力的か②商品として無理があるか 等。部署の立場ごとに判断してもらった。

（3）新商品開発授業のまとめの段階　11月　2時間

⑦各クラスにて新商品のプレゼン（５分間以上）を行い、クラス代表を決める。

⑧体育館にて各クラス代表のステージ発表⇒三州製菓の代表の方々に相談して頂き、１つの商品を採用するか決定して頂く（すべて不採用も現実の社会を反映しているものと考えています）

三州製菓社長のアドバイス

クラス代表ステージ発表

© 金融広報中央委員会 2017

資料６　実際の販売活動

一連の活動の最終段階となる。三州製菓株式会社に中の煎餅の製作は依頼してあるので、外となるパッケージづくり、及び広報をどのように行うかを考えた。結果、デザインを募集してより良いものを生み出すことができた。他にも、チラシをつくり全員でポスティングを武里団地中心に行った。授業ではあくまで２時間しか取っていないが、その後何時間もかけて準備に参加してくれた生徒もいた。

（１）新商品が売れるための準備段階

・１月 ２時間　新商品が売れるための作戦を練ろう

①包装シールのデザイン及びＱＲコード動画の製作

上のデザインに、今までの取り組みが分かる３分間の動画のＱＲコードを載せた。この動画は生徒がコンピューター室で『Video Pad』という無料の動画編集ソフトを使って作成した。画質の関係でこの資料にはＱＲコードを載せられないが、イラストだけでなく、さらに付加価値をつけ、買って頂いた消費者に満足してもらえるような準備を行った。

②武里団地へのポスティング活動

③包装シールの貼り付けボランティア活動

（２）実際の販売活動の段階

・２月 ３時間　実際の販売活動

まさにこの日が今までの苦労が結実した日となった。用意した2400枚が完売となった。

行列は途切れることはなく

図柄は８種類＋α

© 金融広報中央委員会 2017

資料７　生徒の取り組み考察

１年間という長期間の活動となったが、生徒は新しい課題に対して貪欲に探究活動を行い、新たな課題を見出してまた探究していく、こんな日々を送ることができた。特に注目したい新商品開発プロジェクトに関わる感想を抜粋して以下に載せていく。

A この学習を通して、商品を開発する難しさや、どのような商品が広い世代に愛されるか分かった気がする。商品を作る事は出来なかったけど良い経験になったと思う。この貴重な経験を将来の自分の仕事にいかせたらいいと思う。

B　この学習を通して、何か商品を生みだすときは、まごころと思いやり、そして安全を大切にして、人々に喜ばれるものを考えつくっていることが分かった！
もしかすると、将来役に立つかもしれないので、この経験ができてよかったと思う！

C 私はこの学習を通して、プレゼントという人になにかをうったえるというのは、とても難しいことだなと思いました。スーパーのおかしやケーキ屋さんのものとかはきっときがくをしてプレゼントとかをして、人が大変な思いをしていると思うので、そのことを忘れずにいたいです。

© 金融広報中央委員会 2017

Aの生徒は、商品の開発に対しての苦労、そしてどのような商品が世代や地域に愛されるかのヒントをつかんだようである。Bの生徒も同じような感覚を持ち、将来の仕事に役立てることができるかもしれないと経験できたようである。Cの生徒はプレゼンの取り組みを通して、実際に働いている人が大変な思いをして企画していることに気づけたようである。起業家教育の大きな成果が垣間見える。

なお、この一連の取り組みは現在下級生に引き継がれ、論文の執筆時には田んぼの稲がスクスクと育っている最中である。その資金は煎餅の売り上げで賄っている。一過性の取り組みではなく、継続的な取り組みとなっている。これからも新しい学校の取り組みとして続いていく流れができている。

© 金融広報中央委員会 2017